

事業計画書

事業名	芸術による認知症予防及び進行抑制の為の事業と 認知症高齢者の介護者へ支援事業
団体名	クリニカルアートをひろげる会

★貴団体が申請する事業について、お伺いします。

1. どのような地域課題を解決したいのか、その現状や背景などについても含めて記載してください。

①認知症の症状のある高齢者が増加しており、今後ますます増加する事が予測される。
松戸市の『いきいき安心プランⅢ（第5期高齢者保健福祉計画・第4期介護保険事業計画）』によると、松戸市では介護保険がスタートした平成12年に高齢化率11.9%、高齢者数約56,000人であったが、現在高齢化率は18%を超え、高齢者数は9万人に手が届く状況に増加している。
さらに、高齢化率は、計画期間中に20%台に達し、約5人に1人が、さらに平成26年には、約4人に1人が高齢者になるとみられるとある。
そのうち、いわゆる「動ける認知症」の人は、平成20年4月現在で、3,467人に達しており、要支援・要介護認定者の約3割。徘徊などを伴うことが多いため、一般的に介護の手間がかかるとされていると松戸市の事業計画で報告されている。

認知症は、記憶障害や見当識障害、人格障害など様々な周辺症状を起し、ご近所トラブルとなる場合もあり、介護は肉体的、精神的、経済的な負担は大きい。

認知症の介護は一生懸命介護しても感謝されるどころか周辺症状の為に、暴言を吐かれたり、物を盗んだと疑われたりと、嫌な気持ちになることも多く、認知症高齢者の主張をうのみにした同居していない親族や近隣住民から介護者が責め立てられる事も少なくなく、介護者は孤立化するものが少なくない。

家族間の高齢者の虐待も深刻化しつつある。一生懸命介護しても、誰からも評価されず、特に24時間見守りが必要な認知症高齢者の介護は介護者の肉体的な負担は甚大で疲れやストレスから虐待につながるケースもある。

介護殺人や介護心中など事件に発展するケースでは、要介護者が認知症の症状を持つ事が多くなった。特に昨年4月のタレント、清水由紀子さんの無理心中未遂（由紀子さんは死亡）事件は世間に衝撃を与えた。彼らに共通しているのは、気丈に真面目に介護をし、外に向かって弱音を吐かず、介護に関して周囲から孤立していた点にあるものの、他人事と思えぬ家族は多いのではないだろうか。

②認知症の予防事業は、松戸市の『いきいき安心プランⅢ（第5期高齢者保健福祉計画・第4期介護保険事業計画）』の中でも行なわれているが、現在では様々な予防法があり、高齢者の自主性や個性、好みにあったものでなければ高齢者自身が長続きしない。認知症予防法の選択肢がより多くある事が望まれる。

また、現在の様々な地域などで行われている認知症及び介護予防の取り組みは、年齢の制限（65歳以上など）が多い。認知症の高齢者だけでなく、その周囲の方々の支援をする事も今後の地域の課題であると考える。

多くの施設などで塗り絵や絵画造形制作も行われつつあるが、画材は色鉛筆やクレヨンなど安価で質の悪い物が多く、また色の選択も見本通りに行うなど、その人らしさを生かした物ではない場合が多い。本人の手をとって、介護職員が良かれと思って一緒に制作する場面も散見される。認知症高齢者の場合、出来あがった作品はいずれ、家族にとっては形見の品となる物である。そして、認知症になっても感性の豊かさは比較的残存し、人と人として向かい合って制作すると素晴らしい感性アートを制作する能力があるのに、安価な画材で尚且つ個性を重視しない単一なお絵かきが主流となっている。

2. それらの課題を解決することで、どのような地域にしたいのかを記載してください。

①認知症高齢者に対する理解者が多くいて、介護者が孤立しにくい街にしたい。クリニカルアートを行う事で、健常者と認知症高齢者および介護者が、コミュニケーションを円滑に行いながら、共に暮らせる温かい街にしていきたい。

②多くの選択肢の中から認知症予防が出来、生涯学習的な機会が増える事で、高齢者の生きがいづくりの活発な街にしたい。質の高い画材を用いて、よりクオリティの高い作品を作る喜びを多くの方に知っていただき、松戸を芸術性の高い文化的で、あたたかな街にしていきたい。

3. どのような地域課題の解決につながるのかが、分かるように事業内容を記載してください。

・事業内容

※クリニカルアート（臨床美術）とは・・・。

独自のアートカリキュラムにそって創作活動を行なうことで、認知症の症状改善を目的として開発されました。専門の資格（臨床美術士）を有するスタッフが一人ひとりの参加者に沿った働きかけをすることで、その人の意欲と潜在能力を引き出していきます。

認知症の症状改善を目的として始まりましたが、現在では前認知症の人や一般高齢者の認知症予防としても実施を得ています。

以下の事業を平成23年度に助成事業として行う。

①認知症高齢者の介護者を対象とした「臨床アート説明会」及び、認知症の方とその介護者との「合同ワークショップ」を行なう。

(こちらから認知症家族の会などに出向いて行なう事業)

②認知症予防の為のワークショップ

(22年度現在行なっている事業を継続させる)

臨床アートをひろげる会では、現在、22年度松戸市市民活動助成事業として、認知症予防の為のワークショップや、高齢者施設でのワークショップなど、様々な活動を行なっている。

また、助成事業以外にも、在宅介護支援センターが主催する介護予防教室、児童館など、活動の幅が広がっている。

昨年の市民活動助成事業審査結果の審査員の付帯意見として「大学との連携をはかること」とあり、6月には地元の大学の生涯学習のイベントに参加し、ワークショップを実施。

昨年の申請当時14名だった会員数も、現在66名となり5倍近くに増えている。

しかしながら、認知症高齢者ご本人への取り組みが、高齢者施設でしか達成できておらず、在宅認知症高齢者への取り組みが不十分な事は、最大の課題である。

毎月2回行なっているワークショップでも高齢者の参加はみられるものの、認知症高齢者本人および、主たる介護者の参加は見られない。

平成23年度では、平成22年度助成事業の「子ども団体のプログラム」「高齢者施設プログラム」は継続しつつも、助成事業からの自立とし、助成申請から外す。

「地域活動プログラム(受益者参加型プログラム)」に特化し、さらに充実させ、特に高齢者や認知症高齢者、及びその主たる介護者への関わりを中心とした活動を助成事業として行なっていきたい。

この為、次年度では、認知症予防の取り組みは継続しつつ、認知症の症状を持つ方や、その主たる介護者への取り組みも、積極的に行っていく。

・想定スケジュール(事業内容について、具体的な取り組みを下記のとおり記載してください)

	具体的な取り組み	実施体制、対象、場所など
4月～6月	①認知症高齢者の介護者対象の説明会 ②認知症予防の為のワークショップ (22年度の活動の継続事業。)	①3カ月に1回程度。家族の会などに出向き提案。 ②毎月2回(内容は同月と同じ内容)。市内の公共施設または、提供された会場において行な

		う。対象は高齢者を中心としつつ、大人から子供まで多世代の市民と初期の認知症高齢者。
7月～9月	①認知症高齢者の介護者及び認知症の方が対象のワークショップ ②認知症予防の為のワークショップ (22年度の活動の継続事業。)	①3カ月に1回程度。4月～8月に提案したものを認知症高齢者とその主たる介護者にワークショップを提供する。 ②毎月2回(内容は同月は同じ内容)。市内の公共施設または、提供された会場において行なう。対象は高齢者を中心としつつ、大人から子供まで多世代の市民と初期の認知症高齢者。
10月～12月	①認知症高齢者の介護者対象の説明会 ②認知症予防の為のワークショップ (22年度の活動の継続事業。)	①3カ月に1回程度。家族の会などに出向き提案。 ②毎月2回(内容は同月は同じ内容)。市内の公共施設または、提供された会場において行なう。対象は高齢者を中心としつつ、大人から子供まで多世代の市民と初期の認知症高齢者。
1月～3月	①認知症高齢者の介護者及び認知症の方が対象のワークショップ ②認知症予防の為のワークショップ (22年度の活動の継続事業。)	①3カ月に1回程度。10月～12月に提案したものを認知症高齢者とその主たる介護者にワークショップを提供する。 ②毎月2回(内容は同月は同じ内容)。市内の公共施設または、提供された会場において行なう。対象は高齢者を中心としつつ、大人から子供まで多世代の市民と初期の認知症高齢者。

4. 事業に取り組む上での達成目標を記載してください

※事業目標は、できるだけ数値などを用いて、具体的に記載してください。

①認知症高齢者の介護者対象の説明会及び、認知症高齢者とその介護者との合同ワークショップ
説明会ではできるだけ多くの方を対象としたい。
ワークショップでは1回につき1～3家族程度を対象に行いたい。(1回につき参加者が6名)
認知症高齢者の場合は、症状が重いと臨床美術士がマンツーマンで対応することとなり、臨床美術士は一度に多くの方に対応する事ができない。
家族と認知症高齢者の方は、同室で離れた席で同じ作品制作を行なう。
五感で感じる感性を使って制作するので、上手い下手のないその人なりの感性アートが出来あがる。
鑑賞会では参加者全員の作品を鑑賞し、作品の中の良いところを見つけて、具体的にどこが良いと感じる

のかを言葉にしていく。言葉に出して誉めあう事で、自己肯定感の回復と、作品を通した新しいコミュニケーションが生まれる。普段叱られてばかりが多くなる認知症の方は誉められる事で自己肯定感の回復となる。

介護者は自分がアートによって心が開放されるだけでなく、同じ作品を制作した家族の作品を見て心から感動し、衝撃を受ける。まだまだ「人間」としてしっかり生きている事を確信出来る事は、家族としては純粋に嬉しい事である。作品が残るので、ワークショップが終わった後も、作品を家の中に飾ったりして、作品を通して会話が出来、新しいコミュニケーションツールとなる効果もある。

誉め合い認めあえる関係が築け、笑いや笑顔での会話が可能になるので、在宅介護の家庭に希望がもてる。また、終了後にアンケートを実施し、参加者の満足度を知って、今後のよりよい活動を継続していく資料とする。

②認知症予防の為のワークショップ（22年度の活動の継続事業。）

月2回の合計で、15名以上の参加者を目指す。

多世代間で行う事で、多くの方により認知症への理解を深めていただくとともに、初期の認知症高齢者が健常であった頃のように、一般市民の社会空間の中で受け入れる場所を提供する。

また、終了後にアンケートを実施し、参加者の満足度を知って、今後のよりよい活動を継続していく資料とする。

5. 助成金終了後、どのような活動に取り組むのかを記載してください。

・高齢者介護施設内では、高齢者施設職員の為のワークショップも行ない、よりよい介護環境や人間関係の気づきの場を提供する。また、要望に応じ、家族向けのワークショップも行ないたい。

・他のNPOやボランティア団体、個人などとコラボして、互いの得意分野を生かしながら連携して高齢者や子どものストレス解消や人間関係の改善、自己肯定感の回復等のお手伝いを行なう。大学等の教育機関とも継続して連携に繋がる活動を行なっていく。

・会の運営に関しては安定した資金が必要である。

積極的にイベントなどに参加し、有料のワークショップを行ない収入を得たり、寄付を募って、会の活動を継続させていく。会員数を拡大し、年会費の収入を増やす事で、質の高い画材でクリニカルアートを継続して提供できるようにしていく。

また、ある程度、クリニカルアートの存在を市民に知っていただけた段階で、少しずつサポーター会員の参加費を値上げして、認知症の方とその主たる介護者への援助となる活動をさらに充実させていく。常時活動できる臨床美術士が増えてきた段階で、高齢者施設での活動の場を増やし、会の資金面での安定を図る。

事業の予算計画書

【収入】

申請者	(自己資金) 参加費	金額	積算内訳
			150,000 円 ✓
	自己資金合計 (a)	150,000 円	
市	助成金申請額 (b)	100,000 円 ✓	
	収入合計 (c) (a+b)	250,000 円 ✓	

【助成金申請額 (b) チェック項目】

1. 対象となる経費 (d) 欄の 90%以内 ✓
2. 1 事業あたり 10 万円以内 ✓

【支出】

	項目	金額	積算内訳
	交付対象経費	報償費	52,000 円
印刷製本費		14,000 円	チラシ案内のコピー代
通信費		3,200 円	案内文書 80 円×説明会参加者 20 名×2 回
消耗品費		158,960 円 ✓	500 円×15人×12回=90,000 ✓ 500 円×6人×2回=6,000 ✓ オイルパステル 800 円×15 丁 アクリラガッシュ 2,747 円×10 丁 透明水彩・その他 糊など 23,490 円 ✓
保険料		13,440 円	560 円 (団体保険) ×24 回
対象となる経費合計額 (d)		241,600 円 ✓	
その他		交通費	8,400 円
	その他経費合計額 (e)	8,400 円 ✓	
	事業費 (f) (d+e)	250,000 円 ✓	

※ 対象となる経費、対象とならない経費については、募集要項を参考にして下さい。